



ジョルジュ・ベルナノスにおける欺瞞者の問題（一）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天羽, 均 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006556

ジョルジュ・ベルナノスにおける 欺瞞者の問題 一

天 羽 均

ずいぶん前から欺瞞 (imposture) の問題は、本質的なものであるように私には思われる。この問題を解くものは、他の全ての問題の、人間の不幸が課するあらゆる問題の鍵をにぎることになる。ずいぶん前から、もう私は、欺瞞を単純な変装だとは思っていないし、欺瞞者 (imposteur) を、古着屋でときおり自分の衣装をとりかえる下手な役者だとも思っていない。欺瞞と欺瞞者は一体をなし、欺瞞のもとに一つの宿命がある。

(Les Enfants humilés p. 197)

ジョルジュ・ベルナノスが、小説家として、現代世界の証人たらんと志したとき、欺瞞の問題は、深く彼の心を捉えていた。現代世界を支配する原理となった欺瞞の告発と、欺瞞からの解放、それは、ベルナノスにあつては、失なわれた神の世界の回復でもあつた。したがつて、彼の小説はすべて、欺瞞の問題への挑戦であつた。この欺瞞の問題を、一人の欺瞞者のうちに追求しようと試みたのが、「欺瞞」(L'Imposture 1927)である。この作品は、彼の最初の小説作品として、大きな成功をおさめた「悪魔の陽の下に」(Sous le soleil de Satan 1926)

につぐもので、この作品に引続き書かれた「歓喜」(La Joie 1928)とあわせて、当初一つの作品として構成されていたことはよく知られている。^(註)

(註) はじめ書名は、「闇」(Les Ténébre)を予定していた。詳しい成立事情については、プレイアッド版、「ジョルジュ・ベルナノス小説作品集、含カルメリット修道女の対話」の付註その他参照。

本論では、主要人物セナブル師のうちに、欺瞞者の問題を、どのような形で捉えていたかを検討するのが目的である。

冒頭に引用した文章は、「欺瞞」を発表してから二十年余りに書かれたものだが、その同じ「辱しめられた子ら」の別の箇所、作者自身、「欺瞞」とその主人公について、次のように述べている。

私は「欺瞞」を書いて以来、欺瞞者をもう信じていない、あるいは少なくとも、欺瞞者について、全く異なる考え方をしようになつた。「欺瞞」は私にとって、非常に苦しい思いをした本だ。これを書き終えたとき、自分の力を越えた試練を経たあのように、ふらふらで、最後の行を書き終えてからも、私はセナブル師

が、欺瞞者なのかどうか知らなかったし、今でもわからない、私はそのことについて自問するのを止めてしまった。(p. 120)

二十年后に欺瞞の問題を、重視しながら、自己の作品にこのような疑問を投げかけねばならなかったのは何故か、セナブル師の人物像及び、そのドラマの含む意味を分析することで、その手がかりをつかみ、同時に、ベルナノスの小説世界について考えてみたい。

なお本稿は、欺瞞者の問題を一応「欺瞞」及び「歓喜」の人物セナブルの問題に限ったが、ベルナノスの小説には、この二作品の他の人物たち(ペルニシオンおよび「欺瞞」第二章に登場するカトリック知識人グループ)と共に、「悪夢」(Un Mauvais rêve 1950 出版)のガンス、「ウィーヌ氏」(Monsieur Quine 1943)のウィーヌ氏など、この系譜に加えられるべきであろうし、これらの人物を、ベルナノスの小説世界において、聖人たちや、反抗者たちと共に一つの人物群をなすと考えていいだろう。

このような意味から、本稿は、「ベルナノスにおける欺瞞者」の第一章となるべきものである。またシュヴァンス師やシャンタルについても稿を改めて検討しなければならない。

一、欺 瞞 者

セナブル師は「アリウス派の歴史」及び五巻におよぶ「フィレンツェの神秘主義者たち」、ジェルソンに関する著書によって、その学殖の豊かさを示し、特に、彼の大胆さと、いわゆる近代性は多くの若い司祭たちを熱狂させている。また、カトリック・モデルニストたちの中で勢力をもつ人物である。

有能さと著名度、時流をうまくつかまえ、ときには、それに逆らって見せるだけの才覚も持ちあわせているこのような人物の内的生活及び、その危機のドラマという設定は、いかにもポレミスト・ベルナノスらしいものがある。

小説は、セナブルの生活の二重性の破綻あるいは啓示からはじまる。

彼の直接の保護をうけているジャーナリスト、ペルニシオンの凡庸さ、貧しさに耐えられなくなったセナブルは、彼をつきはなそうとする自己のうちに、別の醜さを認める。ペルニシオンに耐え難い思いをするのは、ペルニシオンのうちに、自己の戯画を認めるからだと思付かされる。自分が信じようとしている世界が、虚無に他ならぬことを彼は恐れ、それをおおいかくすために、知的活動の外被をかたく保持していた。ペルニシオンはそのようなセナブルの生活の破綻の一つの契機であった。

しかしセナブルにとって最大のドラマは、この内的生活の危機の中で、呼びよせた、彼のやはり被保護者ともいふべき、シュヴァンス師に相対したときに起る。この対決の場面は、ベルナノスの数多くの劇的な場景と共通したものであり、「悪魔の陽の下に」におけるドニサンと悪魔の対決、「田舎司祭の日記」(Journal d'un curé de campagne 1936)におけるアンブリカールの司祭と伯爵夫人との感動的な対話などと共に、最もベルナノス的な、内的世界の超自然的対決の一つである。

このシュヴァンスとの対話の前後で、セナブルにとって、欺瞞あるいは虚偽の問題は、大きな転換をみせる。欺瞞の問題を、ここでは、この二人の対決の前後にわけて考えたい。

a. セナブルの生活——欺瞞とその源

「フィレンツェの神秘主義者たち」の著者の学殖は確固としたもので、それはちやうど、彼の男らしく、がっちりした、きびしい顔つきそのままである。考証の広さ、そのことからくる研究の力強さは、人を欺くこともできる。主題をうまく選び、大胆ささえ示している。しかしそれらの主題に、中途半端にしか対決しようとしていないように思われる。彼はそれらの主題に斜めから近づくのだ。自分自身の人生の処し方においても同様だ、この精神分析の教授は、自らを正面きって見ることをきらっている。(p. 328)

(註) ベルナノスの小説作品の引用については、テキストは全て BERNA-
NOS : ŒUVRES ROMANESQUES, Bibliothèque de la Pléiade
1961 による。

ベルナノスの人物にとって、se voir en face あつては、faire face という態度は、行動の最も根源的なモラルの一つであった。ベルナノスが常に告発して止まぬ凡庸な人間たち、愚か者たちとは、人生の表面だけで生活し、決してその根源的条件に対決しようとせぬ人たちのことであり、その対決を恐れる人たちのことであった。セナブルの虚偽もこの点に認められる。

このような虚偽と欺瞞の生活の源は、セナブルの幼少時代に求められる。ベルナノスにとって幼少年期 l'enfance が非常に重要なテーマであることはよく知られている。作中人物の形成においても、その幼少年期はきわめて重要な意味をもち、また主要人物たちの幼少年期には、多くの共通点が見出される。

セナブルの欺瞞と幼少年期の関係は、次のように述べられている。
嘘への好み、激しさ、熱中ぶりそれにその絶えざる実行は、存在の真の二重性、真に怪物的な二重性に達していた。このおそるべ

き悪の起源は、ずっと遠くに求められるべきで、おそらく幼少年期の最初にまでさかのぼらねばならない。この百姓の子供は、傲りにむしばまれて、ほとんど無邪気に、本能的に、家の中で召命の悲しいお芝居を演じていたのだ。(p. 362)

その少年時代について、具体的に次のような描写がみられる。

全ての人から棄てられた小さな孤児(祖父の一人はメッツの火夫事件に連座し、徒刑場で死に、アルコール中毒の父、早くから寡婦になった母、彼女はサルスラの貧しい藁家で、教母たちの下着の洗濯やつくろいをし、バルルデュクの施療院で亡くなった)は、選ぶことのできる子供たちとは違っていた。ぬきん出ようという野心、名声への欲求、一寸した不注意で全てを失なってしまう危険をおかしながら、その場で大きくならねばならず、聖職に運命づけられているだけでなく、聖職においても、彼より幸せな、恵まれた競争者達の中から、頭角をあらわさねばならぬように運命づけられていた。(p. 364)

孤児、早く死んだアル中の父親、働きもので辛酸をなめつくす母親、このような環境とみじめな少年時代は、まさにベルナノスの司祭たちのものと共通している。^(註) こういったことから、このようなセナブルの過去は、単に彼の虚偽の生活を幼少年期にさかのぼって心理的に説明しようとしたものではなくて、作者がセナブルにベルナノスの人物としての共通の刻印をしるしているものであることに注目しておかねばならない。

(註) 「田舎司祭の日記」のアンブリクールの司祭の幼少年期及び「ウィーヌ氏」のフヌィユの司祭の幼少年期の酷似については、拙稿「ベルナノスの『ウィーヌ氏』における司祭の問題」(フランシシア八号一〇四頁) 参照。さ

らにベルナノスの人物たちの多くが、孤児あるいは、片親を早くに無くしていることは興味深い。

このように自尊心と野心、そして競争者に打ちかつ必要からも、セナブルに与えられていたのは強い性格であり、「このセナブル師の強い性格は、その性格について、多くの人が思い違いをし、うわべの人のよさに迷わされていたが、未完成の仕事嫌い、努力の限りをつくすものである。」(p. 364)

この性格の中に我々は、既に見たベルナノスの反抗者たち、「行くところまで行かねば止めぬ」人物たちとの共通点を見出す。これは「自らを正面きって見ることを嫌う」という態度と矛盾するものではないからうか。

この性格の強さは、セナブルが、自分の条件、自分の出発点を否認し去るために必要であったし、執拗な否認という態度のうちに、自己の根源的条件との対決を避けていた。神学校時代、自分の故郷に帰るのがいやさに、うそをついて休暇にも寮に居残った彼。「彼の前進の一步一步は、過去との断絶であった。今では、名前も忘れた僅かばかりのいとこたちしか残っていない家系、故郷、鉄道で通るときでさえ、心が苦しくしめつけられずにはいられない故郷、彼が逃げ出した教区、その老司教は、彼にとって、最も手強い危険な批判者の一人だった。」(p. 459)

同じ幼少年期をもち、あるいは同じ「はてまで行く」性格をもちながら、ベルナノスの司祭たちや、反抗者たちとは、違った極に立つ欺瞞者が考えられている。自らを悪にすら賭けようとする反抗者たちと、セナブルをわかつのは、セナブルにおける幼少年期の否認という点である。司祭たちにも、反抗者たちにもその激しい行動の源は、彼らの幼少年期―辱しめられた幼少期であり、それは又彼らの人物の根

源そのものであった。

b、愛

セナブルの幼少年期について、小神学校時代の司祭は、最も勤勉な生徒の一人であったセナブルについてどうすることもできぬ嫌悪を抱いていたが、その理由を問われたときに「―私の思うには、彼は愛していない、自分自身をすら愛していない……」(傍点原文では大文字)と答えている。

この愛の問題、特に自己に対する愛は、ベルナノスにとって、今一つの重要なテーマである。田舎司祭は伯爵夫人に向かって、「地獄とはもはや愛さぬことです」と述べる。「欺瞞」の中でも、ゲルーがペルニションに向かって、同じ意味のことを述べる。「自己自身を嫌悪するときは、何もかもいいのだ。だってそうだろう。自己のうちの自己自身なるものを憎む、それは地獄じやないだろうか？」(p. 437)

ベルナノスにとって、愛こそが、人間の条件の追求の根本的原理である。それは単にキリスト教的愛 (charité) であるばかりでなく、この現実の世界への愛 (amour) なのであった。このことは、キリストがこの地上の世界をいかに、人間として愛したかを描いている「歓喜」の感動的な描写 (p. 664) によっても明かだろう。

この愛の根源は、何より自分自身に対する愛、即ち自己に課せられている条件を徹底的に引き受けることに他ならない。このことについて、「歓喜」の中でシャントルは次のように述べている。「私には人が自分自身に対して犯す嘘ほど恐ろしいものはないように思えます。」ベルナノスは、欺瞞あるいは虚偽と自己との根源的なかわりを重視している。

偽善者とは何よりも、自分があるがままに見ることの嫌悪から、

自己自身をはっきりと定義する前に、軽々しく、他人に対する態度を決めてしまう不幸な人間だ。(p. 459)

彼(セナブル)はつねに、まず本能的に、ついで意識的に、彼の安全をはかり、自ら不在証明をつくりだす主な必要性に従がっていた。深い偽善は、このようにして、内部にその嘘を形づくり、その嘘にまず最初に欺かれたのち、理性の努力によってしか、その嘘から離れられない。(p. 342)

このような自己の根源をおおい隠す生き方は、セナブルのみならず、ペルニシオンはじめ、この作品に多く登場する偽善者たちに共通してみられるものである。

c、知力、好奇心

セナブルの幼年期以来の虚偽、あるいは欺瞞の生活は、彼の野心を満足させ、望み通り同僚たちから一きわぬきん出た聖者伝作者としての成功をもたらした。その限りで彼は安全を守り、「アリバイ」を立派につくった。この欺瞞者としての生活を支える原理は何か。ベルナノスがセナブルのうちにあばこうとしたその原動力は、セナブルの現在の名声を支えている知力(intelligence)であり知的好奇心であった。

しかしとりわけ彼の異常なまでに意識された知力(intelligence)はいつも恩寵に対する彼の最上の武器であった。残酷さがその原動力になっているようにみえるある種の好奇心に動かされて、彼の知力はその数々の、非常にたくみに隠された、不思議な征服に、すぐに夢中になってしまった。そして既にこの子供っぽい頭

のうちに、陰険で頑固な作品、毒された心にとっては輝やかしく、しかも空しい書物、いつわりの、きれる、情容赦のない分析のモデルともいうべく、非常にこみいっているので、つねに欺される者がいるだろうような仕事と靈感のモデルというべき作品が生まれていた。(p. 366)

一方、シュヴァンス師は intelligence の不毛性について次のように語る。

ああ、愛(charité)は我々を同じ一つの心に結びとけあわすことができます。だが知的世界は、澄んだ凍てつく孤独です……そうです、知力は、光が結晶体のあつみを通りぬけるようにすべてを貫くことができます。しかし知力は人の心にふれることも、心をつかむこともできません。それは空しい観照です。(p. 354)

セナブルの自己の源を否認し、それゆえに常にアリバイを求め、たくみに自尊心(orgueil)をまもる生き方は、シュヴァンスのつねに自己の源から来るものを守り、内気であり、無器用に無知をさらけ出す生き方と対照的であり、この対照の根源となるものは、右にみた intelligence を基礎とする curiosité の原理と、amour の原理である。ベルナノスがポレミストとして常に現代世界において告発していたのも世界を不毛にする二十世紀文明を生んだ intelligence への信仰であり、その点においても、この作品は、彼のポレミックな作品ときわめて深いかかわりをもっている。彼がいわゆる知識人の世界を、この「欺瞞」の背景にとりあげ、多くの知識人たちを登場させたのも、この作品の性格をよくあらわしている。「欺瞞」はベルナノスの作品中、パリを舞台としたきわめて稀な例である。

d、絶対的偽善と凡庸さ

セナブルの中で、欺瞞と、先にふれた「窮極まで行く」性格との矛盾はどのようにして一人の人物像に結びつけられているのであろうか。

セナブル師の人生もまた、その鍵をもっている。ほとんど絶対的ともいえる偽善だ。そこにただ、他人に関する、精神的アリアバイに関する、絶えざる追求だけをみてはならぬし、それは野心の単なる計算と混同し得るようなものななかではなく、何かそれ以上のものだ。(p. 362)

こうした「絶対的偽善」という表現の中に、ベルナノスは一つの否定的綜合を試み、彼の「反抗者」と対置しようとしたのではないだろうか。「反抗者」の生き方における、ベルナノスに特有の発展の諸段階については、既に、検討したところであるが、「欺瞞者」、具体的には、セナブルにおいて、それがどういう形をとるのかを、ここに検討したい。

(註) 反抗のテーマにおける構造については *Les révoltes chez Georges Bernanos* 及び「ジョルジュ・ベルナノスにおける反抗の問題」(仏文学大会関西支部会発表、同稿は大阪府立大学独仏研究室編「独仏文学」三号所載)において検討した。

セナブルが武器としていた、*intelligence* を基礎とした、彼の好奇心はまた、凡庸さには我慢がならない。野心にみち、競争者にうちかつことを目的としていた彼の生涯は、凡庸さへの軽蔑を絶えずもっていた。凡庸さとは、決して頭がいいとか、悪いとかいいう問題ではなく、人生に対する処し方の問題としていのである。セナブルはペルニシオンに次のようにいう。「あなたの凡庸さは、当然、虚無に、悪と善の間の無関心な状態にむけられている。いくらかの悪徳について

の、苦しい会話が、あなたに人生の幻像だけを与えるのだ。」(p. 320) 又、ペルニシオンは自ら「彼のすべての誤ちを集めても、真の悔悟の材料とならぬことを知って、ぞっとした。」

ペルニシオンは、セナブルを告解師とも、師ともするジャーナリストである。彼は保守派の財界人から財政援助をうけて、社会主義的な目的をもった、急進派の宗教新聞「現代生活」を編集している。この三重のあいまいさは、カトリック・モデルニストと呼ばれる宗教界の知識人のもつあいまいさを端的に表わしている。ペルニシオンは、このような世界の傀儡的存在であり、セナブルにとってはそれゆえに一層、軽蔑しながらも鏡を見る思いをしたのであろう。

作品の第二章は、小説全体の構成からいえば、人物の上からも、物語の発展の上からも、不自然な章であるが、セナブル師の生活している世界、その世界のもつ欺瞞性を一つのタブローとして示している。

このような善にも、悪にも自らを賭けぬ生き方を、ベルナノスは又生ぬるさとも呼んでいる。このような欺瞞性そのものは、どの時代にもみられる問題だが、この欺瞞が世界の原理そのものとなっている点に、ベルナノスは現代の問題をみる。そのような欺瞞の奥底にある悪魔的なものは一体何なのか。セナブルにおける欺瞞者としての問題の二重性は、このような問いかけの果にたち現われる。

凡庸さのうちに身をおき、泳ぎまわっているペルニシオンに我慢がなくなつたとき、彼はその嫌悪の奥に、自己への嫌悪が隠されていることに気づかされる。セナブルはこのいとうべき凡庸さの原理が、人生あるいは内的生活に対する、ごまかしの中にあることを見ぬいた。そのような洞察力について次のように描かれている。

好奇心には、この暗い火はないし、軽蔑なら、この悲しさはない。憎悪にはこの苦さはない。ペルニシオンは蒼ざめて、万力にしめつけられたように、自分が開かれ、腹の中まで見通されるの

を感じた。この不可解な視線をのりこえ、うけとめることができず、一瞬彼はその視線の中に探し求め、凍りついた心の底から、そこに狂気のかすかなひびき、狂気のゆがんだ炎をみつけどさうと望んだ。しかし、その視線は、まっすぐに彼の肩の上に落ちかかっていた。文字通り、彼はその視線の形と重みを、あたかもみじめな意識を貫ぬくのを軽蔑して、視線が、その意識をなぞり、嫌悪とともに捏まわし、その上に光を走らせているかのよう感じた。すぐれた洞察力のはいりこんでくるのを感じるのには、すでに激しすぎる屈辱だが、恥辱は、他人の明察が我々を、我々自身の下劣さのただ中で露わにするときに、その頂点に達する。(p. 316)

こういった洞察力はベルナノスの小説の中にあつてはしばしばドラマを生みだす契機になっている。全てのこと無器用でへまなベルナノスの聖者となる司祭たちに与えられた唯一の力は、この超自然的に他人の魂の中に入っていく能力であった。ベルナノスが「歓喜」のラ・ペルーズにおいてのように、しばしば心理分析や、精神分析を疑わしいものとして扱い、小説についても、いわゆる心理小説といったものを信用しないのは、このことと大いに関連があると思われる。ベルナノス小説において、悪魔の影と共にミステックな要素となるのが、こうしただけで他人の魂についての洞察力、あるいは透視力である。

セナブルにこの他人の心の底を見通す力が与えられていることは、ベルナノスの人物として選ばれている一つのしるしでもあり、またこのことが彼自身のドラマの、この小説における出発点をなしていると考えられる。

ペルニシヨンのドラマがセナブルにとつてもつ意味を今少し追つてみたい。

しかしセナブル師は、心の内でこのちっぽけな男を何と比較して

いたのか。なぜなら人はこのようにして自己自身の辱められた部分だけを見つめるのだ。(p. 317)

こうしてセナブルのペルニシヨンへの追求を激しく行なえば、それだけ自分自身の中にある辱められた部分に迫ることになる。

この最後の話し合いは、と再び声はつづけた、あなたのために徹底的に押し進められるだろう、そして私が自由になるためにも。

(中略) 私は膿がふきだすのを見たんだ。(p. 319)

ペルニシヨンとの対話は、セナブルの内部に既に用意されていた破局のあらわれる契機であり、自己の否認の極に再び立ち現われる自己の姿に他ならない。

自己から逃れようと望み、しかも、彼がほとんど無意識に本物と置き換え、彼が本物だと信じこもうとした、これら想像上の人物に、実際は夢中になり、その斜めの道の終りに、ああ、彼は自分にしか出あわなかった、いつも自分だった。彼の描く聖人たちに欠けていたものは、まさに彼に拒まれていたのだ。自分を隠そうとする一つ一つの努力が自分自身の欠陥をさらに明らかにする。どういえるか……彼の幻影に何らかの現実性を与えようとして、彼のもつものを剥いでいった。彼をおおいかくしてきた大事な嘘を、最後にいたるまで……彼は自分が裸になったのを見る。(p. 330)

これがつぎのシュヴァンス師との対決の意味であり、欺瞞者としてのセナブルの真の苦悩の生活への大きな転換である。

二、欺瞞の超自然的意味

a、シュヴァンス師

それはある段階の終りをしるしていた、というよりは別の道、たどるのがおそろしい、未知の道への出発点であった。狂人は、一つの叫び——あるいは他のあらゆる徴候——が彼にその錯乱を納得させるにいたるまで、その狂気を静かに抱いているものだ。

(p. 327)

ベルナノスは、セナブル師における転換をこのように描いている。しかもこの転換の意味は、貧しいシュヴァンス師の存在によつてはじめてセナブルに与えられる。シュヴァンス師の存在そのものが、セナブルの内部から、彼の気づかぬもの、叫び、挑戦をひきだし、その内奥に動くものをひきだす。ここではシュヴァンスは、他のベルナノスの聖人たちと同様、混乱の契機であり、混乱と無秩序をもたらすことで、その中にある本質を啓示するという役割を負っている。

シュヴァンスは、ドニサン、アンブリクールの司祭、それに彼自身の霊的娘である、シャンタルなどの人物と共通の、いくつの特徴を備えている。

この作品では、セナブルもシュヴァンスも共に聖職者であり、それ故に、この二人の間には、はっきりとした対照が考えられている。セナブルが碩学で、高名なアカデミー会員であるのに対し、シュヴァンスは、「女中の告解師」とあだ名されるほどで、時流にさとい、世俗的成功に夢になる説教者とは縁遠く、「最も打ち棄てられた女たち、最も嫌われる羊、群の中で、最も傷ついた女たち」に愛情をそそいでいた。反知性的、不器用、単純、つましさ、というベルナノスの聖人に共通の特徴——セナブル師の諸特徴と対立する——を備えている。

セナブルは教会参事会員であり、シュヴァンスは、正規の教区のヒエラルキーの外にあって、輝やかしい同僚の代理として、告解所の仕事をつとめるうちに、ずっと告解所につめるようになった司祭である。しかも、気の狂った娘のために、悪魔祓いの祈禱をしたというスキャンダル^(註)によつて、それまでの教区を離れねばならなくなり、しばらくのちに、セナブル師の力添えではじめてパリの司教区にむかえられることができたのだ。

(註) R. ドニサン師における悪魔の誘惑

この対照的な二人に共通なのは、おそらく彼らのおかれてある孤独だけであらう。シュヴァンスのもっている慎しさが、セナブルの内にあるものを表面にひきだす契機となっている。humble, humilité, humblescat という単語が、この二人の場面において、非常に多くシュヴァンスの行動について使われているが、それはセナブルの内奥の悪魔的なものへの挑戦であるように思える。

ただ一つある種の純粋さ、ある種の単純さ、聖人たちの崇高な無知だけが、悪の弱点を捉えて、その厚みの中へ、古い嘘の厚みの中へはいりこんでいくことができる。(La Joie p. 561)

しかしながら、シュヴァンスの視線のつましい懇願に、セナブル師は、われにもあらず、それに答えて、「私は信仰を失なったのだ。」といってしまった。(34)

セナブルが、信仰を失なったと告白し、自殺の誘惑について語っても、シュヴァンスはその言葉にまどわされることはなかったし、自らの言葉がひきだす自己の内の現実を直面させられるのはセナブルであ

った。

b、虚無の世界

このセナブルの内なる現実こそ、ベルナノスが欺瞞のうちに追求しようとした超自然的意味ではないだろうか。

ベルナノスは反抗の世界においては、神への冒瀆、挑戦あるいは否定による反逆の原理として、悪魔の世界を考え、反抗の帰結として神の対極であるべき悪魔の不毛性を露わにすることによって、反抗の中に超自然的転換の契機をみようとした。「悪魔の陽の下に」のドニサン師を襲った「絶望の誘惑」も、悪魔の誘いであった。ベルナノスは、この悪魔というネガをつかってポジティブな神の存在をあらわそうとした。しかし今一つ徹底的にネガティブな世界の存在について考えていた。それは虚無の世界である。

「あなたにとっては、反抗や、瀆神の方がいい、千倍もいい、と以前の臨時主任司祭（シュヴァンス——訳註）は、胸の上に手をあわせてつづけた……ああ、参事会員様、瀆神のなかには、神への何らかの愛があります。しかし、あなたの住んでおられる地獄は最も冷たいものです。」(p. 356)

セナブルが信仰の喪失、苦悩は全て、自分の傲りのゆえの無意識の演出であったことを認めたとき、自己の内にあった虚無の世界と対決させられる。

このことについては、小説の中でも様々な表現でくり返し語られているので、ここでは引用を最小限にとどめておく。

空しき、彼の苦悩の偽装をはっきりと認めることは、最後の一撃をもたらし、現在より過去への最後の絆を断ち切り、彼を空虚の

中に取り残した。信仰は、それがかつて存在したことがなかったかのように消失した。この瞬間彼は自分が今まで生きていたことがなかったかのように思った。抵抗を、引裂かれることを感じるためなら、最も苦しいものであれ、彼が現実だと信じていた存在、今は消え去り、何ものもそのあとにやっつてこないものの静かな消滅以外のもののためなら、何でも与えたらう……しかし超自然的沈黙は彼の上に、永遠に、封印したように思われた。(p. 335)

誘惑は我々をためす、疑惑はたくみな責苦だ、だがセナブル師は毫も疑っていなかったし、彼は試みられてもいなかった。これらの試練と、彼の最後の叫びにあらわされた、くらい事実の相違には、まさしく欠除を虚無から分つものがある。場所が空っぽなのではない、場所などないのだ、何にもないのだ。(pp. 333, 334)

セナブル師の生活は、(中略)絶対的拒否のおそらく唯一の例だ。

このように見棄てられ、不毛にされた心を思い描くためには、絶望までが静止し、岸辺もない大洋の、潮の満干もない、そのような地獄を考えねばならぬ。(p. 443)

虚無、静止、沈黙などがこの地獄をあらわす言葉であり、神への疑い、反抗、否定という激しい動きをもつ反抗者の世界と異なった次元において考えられている。ベルナノスの反抗者たちの多くは悪魔の世界の不毛性をかいま見たとき、自殺の道を選ぶ。セナブルの自殺の試みは、ついに成功しない。ここで彼の虚偽あるいは欺瞞は、これまで彼の生活を支える原理、原動力となっていた意味を全く剝ぎとられ、死の原理となる。しかもセナブルは絶えず、そのような自己と対決して生きるように運命づけられる。何のために？ おそらくこれはベルナノスの小説を解く鍵だろう。

c. 傲り、憎悪

ベルナノスは、現代社会のもつ諸矛盾、特に近代化という名のもとに、フランス革命以来発展してきたブルジョワ社会が、二十世紀になって、世界大戦という悲劇を生むにいたったことを、鋭く攻撃したが、そのときに、現代世界を支配する原理として、欺瞞——この死の原理について考えていた。そして、欺瞞の場合にも、反抗の場合と同様、社会的な次元での虚偽と、超自然的な、あるいは、人間の根源的条件に関わるものとしての欺瞞という二重構造を考えていたように思われる。

セナブルにおける右にみた転換は、この構造を示している。欺瞞の問題が、単に社会における人間の行動のしかた、モラルだけにかかわるものではなく、神の世界、生の原理に対する悪魔の世界、地獄であり、死の原理の存在をすら考えた。

「悪魔の陽の下に」において、悪魔の姿を描いたが、その中で、この悪魔の支配する虚無の世界について、次のように書いている。

悪魔がいかに神との相似を押し進めようと、いかなる歓喜も悪魔からは生じない。しかし、内臓をしか動かさぬ肉欲よりははるかにすぐれて、彼の傑作は、静かな、孤独な冷たい虚無の喜びにも似た平和である。このおくりものが差し出され、うけとられるとき、我々を守る天使も茫として顔をそむける。(Sous le soleil de Satan p. 213)

悪魔の世界が差し出されたとき、反抗者であるムーシェットは、自殺の道を選んだが、セナブルは、その明晰な意識をもって、この世界にとどまろうとする。しかし、それは先に見たように、孤独と虚無の

世界であるから、いかなる行動の原理も提供しない。ただこの虚無の世界をみつめるために、くみつくすためにだけ生きるように思われる。

自己の眞の姿についての啓示をうけたセナブルは、絶対的拒否、あらゆる信仰と、あらゆる望みの喪失、さらにつき進んで、虚無への信仰すら生まれる。この悪魔的信仰の中において、これまでの、野心のためとは違った理由で、自らの生活をこれまで通り続ける。それは、シュヴァンスとの対決、自殺の衝動、といった試練のあとで、バランスをとりもどし、彼のこれまでの体系に、何の乱れもみせぬことに對する誇りであった。自分の中の虚無の世界を啓示され、その虚無の世界を内に抱いて、司祭としてのつとめを、これまで通りに、これまでに以上に忠実につとめるといふ瀆神的生活をいとなむ。この生活を支える地獄の原理について、ベルナノスは次のように述べる。

おそらく、彼(セナブル)は、まだ漠然とした恐れや、前兆、意識の底にある、盲目的で卑屈なこれらあらゆるものについて、はつきりと考えることはできなかったであろうし、彼はただ、自身を、完全に解き放つためには、最後の努力をすることだけを考えていた。彼がその努力を望んだとしても、あるいは、彼がより単純に、ゆっくりとした、しかし信じ難い荒廢の極に達したとしても、彼の全生活は、傲り(orgueil)を支えとしていた。そして彼は、そこに強力で、確実な基礎を見出したと思ひこんでいた。傲りには、何も固有なものはなく、ただ自分自身を喰ひ荒す魂に与えられた名前にすぎぬことを知らぬ男の奇妙な誤ち、この嫌うべき愛の倒錯が、実を結んだとき、そのときからそれはもつと意味の豊富な別の名、実質になる、憎悪だ。(p. 446)

ここで我々が先に愛(amour)の源が、自己の根源的条件に對する

愛を基点とし、その否認のうちに、憎悪の本質をみた、その図式がいまひとつ、自己への倒錯した愛(orgueil)としての憎悪と重なりあい、地獄の原理そのものとなるのを見る。ミシェル・エステヴが「欺瞞」のテキストにつけた註において、「二つの罪がセナブルを、ベルナナスが形而上学的視点において長い間探求した、欺瞞へと導く、それはorgueilとcuriositéである。」(プレイアード版前記作品集 p. 1768)と語っているのは、この図式をさすものであろう。amourと対立するcuriositéが、他者をみつめる眼のあり方とするなら、倒錯した愛の眼が自己にむかったものがorgueilに他ならない。このゆがんだ自己愛ともいうべきorgueilは当然ambitionを導き出し、はじめに見たように、intelligenceを基礎として、自己についての虚像をつくりあげていた。ペルニションとのドラマに象徴されているような、凡庸者への軽蔑は、こういった生き方の当然のあらわれであろう。

シュヴァアンスとのドラマのあとこのambitionの支えていた世界から解放されたセナブルをなおも支えているのが、orgueilであり、完全な自己の解放がこのようにorgueilを基盤として考えられる限り、それは右に引用した文に見られるように、ひとつの虚像であり、本来的な、裸の自己への危惧、憎悪から逃れることはできない。

彼がある夜パリの街で、一人の浮浪者との間に求めた、自己の解放とは、このような彼の、自虐のドラマであった。

a、浮浪者の出生

作品の第三章を占める、セナブルの浮浪者との出会いは、この小説の中でも、かなり特異なもので、ドストエフスキーのいくつかの場面を思わせるものがある。徹底的な自虐、自嘲を人前にさらすおぞましい浮浪者の墮落(avilissement, dégradation)のうちに自己の苦悩のイ

メージを追い求め、あらゆるみにくい嘘——自分をいじめつけることで、他人の目の前に自己をひさぐこの浮浪者の中で、真実かどうか区別がつかなくなってしまう嘘——をしぼりだすことで、自分自身の意識の中の世界の奥底におりようとする。闇の世界での自己解放を求め、何時間もパリを、浮浪者と共に彷徨する姿は、サタンと闘い、闇の平野を堂々めぐりするドニサンの場面を思い出させる。しかし、セナブルは、あくまで闇の世界の共犯者として、泥にまみれた自分の姿を追い求める。

ここで注目すべきことは、この浮浪者がセナブルにとって果す役割は、やはり、セナブルの内奥の世界の啓示者であるということであろう。既に見たペルニション、シュヴァアンスと同様、ここでも浮浪者との邂逅、対話は、セナブルの内的ドラマとなり、彼の生活の転換点を示す。

卑劣さ、嘘言の極限に、自己の解放を求めたこの長時間にわたる彷徨の末に、

彼は自分の恐れが空しいこと、逃がした機会は、機会があったとすればの話だが、もうやってこないだろうことを感じた。彼には、苦い、おぞましい、彼にしか知られないし、人に伝えることも不可能な喜び、自分自身の意識の奥にふれたという、自分の魂を乱暴にも踏みこじったという喜びしか残らないだろう……(p. 480)

と警察のすみに横たわる浮浪者を、最後に見つめる。

ペルニションのもっていた醜さが、intelligenceを中心とする世界のものであるとするなら、浮浪者のもつ醜さは、さらに根源的なものである。このことは例えば、浮浪者を前にしたセナブルの心の奥底から甦えってくるのが、はじめにみた、彼の嫌悪し、逃れようとした幼年

時代の姿であることにも表われている。

こうして醜悪さと、屈辱の極に、自己をおとしめることによって求めた自己の解放は、ついに訪れなかった。この邂逅のもたらしたものは、彼がシュヴァンスとの出会い、自殺の試みの失敗のあとも、あらゆる信仰、希望の拒否のゆえに、またそのためにこそ守りつづけてきた外的生活における、見せかけの秩序からの解放であり、自己を卑しめることによって、自己に対する偽りの生活からの解決であった。

「歓喜」に登場するセナブルは、こうして、とつぷりと虚無の世界に身を沈めた人物であり、娘のシャンタルの露的指導のためにと招いたクレルジュリーを失望させる。

彼はもはや彼の欺瞞を養うものをもっていなかった、欺瞞は彼のうちにあつて死んだ果実のようだった。(La Joie p. 633)

e、欺 喜

このようにして、かつてムーシェット（「悪魔の陽の下に」）の中に、反抗の姿勢を通して、悪魔の世界の不毛性をあばきだしたベルナノスは、欺瞞のもつ、幾重もの層をはいでいくことで、最後に全ての支えとなる原理を失なつて虚無の世界そのものとなる欺瞞の姿を描いた。この徹底してネガティブな世界は、セナブルの奥底に沈みこんでしまい、彼はひとり、そういった自己とむかいあう。「それ以後彼はどのようなふりをしてみても、自分自身に決定的な白状をしたのだった。彼はもはや、彼の魂の暗闇の中で、彼の真実、彼自身の真実を、逃げだしたり、追いかけたりするあの恐ろしい遊戯をできなくなるだろう。」(La Joie p. 633)

セナブルを、この暗闇の奥底からひき出せるのは、徹底した愛の原

理である歓喜を、神に捧げる娘シャンタルだけであった。歓喜あるいは、のぞみ (espérance) の原理は、ベルナノスの欺瞞の問題を検討する上に、極めて重要なものである。

最初「闇」Les Ténébrsの名のもとに一つの作品として、構想された作品の後半が、「歓喜」という書名で一冊になったことは、この新たな二作品のもつドラマを暗示する。それはセナブル師とシュヴァンス師及び、彼の霊的娘シャンタルとの間のドラマでもある。

シャンタルの世界、歓喜についての詳しい検討は次章にゆずるが、ここで、シャンタルはシュヴァンスと同じく、単純さ、謙虚さ、弱さ、貧しさといった、ベルナノスの聖人たちに共通の特徴だけを指摘しておきたい。セナブルが、自分自身の解放のために、これまでやろうとしてできなかった、自己のうちの闇の世界の開示が、小さな存在であるシャンタルを前にしたとき、彼自身の言葉のうちになされる。

ここでもシャンタルは、啓示者の役割を果す。それはセナブル自身の闇の世の世界の開示ばかりでなく、使用人フィオドルに殺されるシャンタルのみじめな死によって、セナブルの欺瞞の贖いの啓示とさえなる。このとき、闇の世界に自らをおいたセナブルの転換——そして最後の転換は狂気の世界であった。

このような二人の人物の対決が常に一つの啓示をもたらし、人物像を段階的に発展させていくやり方は、ベルナノス小説の構造の特徴であり、作者自身による人物分析、肖像の描写の部分の極めて多いこの小説にあって、小説をドラマチックなものにしている最大の要素であろう。

二人の人物の間にドラマをつくりだす条件あるいはカギは、自己との対決にあるように思われる。この小説において、第一章について多くの頁をさいている第二章において、あれほど多くの会話を中心とし

ていながら、ドラマチックにならないのは、このような意味での啓示がみられず、即ち、きわめて非本質的な対話で構成されているからで、また、ベルナノスは、ここに扱われた世界の非本質性を、このよ
うなやり方で象徴しようと意図していた。「田舎司祭の日記」が、日記体の一人称小説でありながら、すぐれてドラマチックな性格をもつのは、田舎司祭と伯爵夫人の対話にみられるような、啓示者としての司祭の役割が、伯爵夫人に強くはたらきかけるドラマがあるからである。こうした対話、対決のベルナノス小説における意味について、先に、拙稿「ベルナノスの『ウィーヌ氏』における司祭の問題」(フ
ランシア八号)において少しふれたが、ベルナノス小説の構成を考える上において、きわめて重要な問題を含んでいるものであり、改めて詳しい検討がなされねばならない。

おわりに

欺瞞の問題は、本論のはじめにも見たように、現代世界を支配する強力な原理であり、ポレミスト・ベルナノスは、あらゆる機会をつかまえて、告発することを止めなかった。一方小説家ベルナノスは、この欺瞞の超自然的意味を「欺瞞」において追求しようとした。この作品において、彼のとった方法は、「悪魔オウゴの陽の下に」で、反抗者ムーシエットのうちに求め、「田舎司祭の日記」の反抗者たちに司祭が示すことになるのと同じ、人間の根源的条件への対決を強いることによつて、反抗者、欺瞞者に、悪魔の世界、闇の世界がネガティブにすぎないことを示すことであつた。このような、とりわけ現代世界が深く冒されているネガティブな世界を救い、贖うものこそ、オリーフの園におけるキリスト、十字架上のキリストの死の苦悩であることを、ベ

ルナノスは考えていた。シユヴァンスの死はオリーフの園のキリストの苦悩であり、シャンタルの死は、十字架上のキリストの死である。それでは、冒頭にあげた「辱しめられた子ら」の引用のなかで、セナブルが果して欺瞞者であつたかどうか知らぬし、欺瞞者について、考えを変えた、と述べているのは、いかなる意味においてであらうか。

ベルナノスはこの小説の時点において、セナブルの即ち、欺瞞者の救済の問題を考えていた。それはまた、現代世界の救済の問題でもあつた。しかし、欺瞞者の中には、はじめにみたように、矛盾が含まれていた。欺瞞者の中には、自己追求、という命題が、それである。欺瞞の中に身をおく者の、自己の追求は、即ち欺瞞の自己貫徹に他ならない。(その故にこそ、贖罪者の必要があつた。)一方、セナブルの自己の追求の仕方のうちに、他の欺瞞者、あるいは凡庸者と異なつた激しさ、反抗者にみるような激しさを分ち持つことで、救済の可能性を考えていたのではないか。ここにおそらく欺瞞の貫徹性をとびこえたところがあつた。

しかし、現実には、欺瞞は、ますます正体のわからぬ怪物と化し、貫徹の意志をゆるめないのは、彼の多くのポレミックな作品の証言する通りである。欺瞞者というのは、一層正体不明のものになり、セナブルのようにすじの追えるものではなくなつてきた。欺瞞者は、ヒットラーやムツソリーニではなく、現代社会そのものではないか。ベルナノスが、「ウィーヌ氏」を書いたとき、おそらく彼はこのことを深く考えていたに違いない。ウィーヌ氏のもつ不可解さ、正体の不明なこと、殺人犯人であるかどうかさえ、立証する手がかりが与えられぬ謎。しかもウィーヌ氏の体現する原理がこの「死せる教区」の原理そのものであること。etc. こういったこと全ては、おそらくベルナノスが「欺瞞」を書いたときに考えた、欺瞞あるいは、欺瞞者の姿を大き

く変えてしまったように思われる。

欺瞞の問題は、ベルナノスが、現代世界の証人たろうとする意味をもちつつける限り、彼にとって、最も重要な問題であることを、止めなかつたし、彼のポレミシクな作品と、小説作品をつなぐ点でもあった。何よりも、現実世界と、彼の小説世界との重要な接点であったように思える。(一九六八・一一・七)

参考文献

L'ŒUVRE DE BERNANOS

Georges Bernanos Œuvres romanesques ; Bibliothèque de la Pléiade 1961.

Sous le soleil de Satan

L'Imposture

La Joie

Journal d'un curé de campagne

Monsieur Quine

Les Enfants humiliés ; Gallimard 1949.

ÉTUDES SUR BERNANOS

BEGUIN, Albert : Georges Bernanos par lui-même ; Seuil 1954.

ESTEVE, Michel : Bernanos ; Gallimard 1956.

MILNER, Max : Georges Bernanos ; Desclée de Brouwer 1967.

BRIDEL, Yves : L'esprit d'enfance dans l'œuvre romanesque de Georges Bernanos ; Minard, Lettres Modernes 1966.

DEBLUË, Henri : Les romans de Georges Bernanos ou le défi du rêve ; La Baconnière 1955.

STORELY, Sven : Aperçu sur le thème du mensonge dans l'œuvre ro-

manesque de Bernanos (Études bernanosiennes 3/4) ; Revue de Lettres Modernes 1963.

DANSETTE, Adrien : Histoire religieuse de la France contemporaine ; Flammarion 1965.